

## 主な出展リスト

### 『牝鹿』(1924)

- ◆ バレエ・リュス公式プログラム/モナコ:モンテカルロ歌劇場/1924年1月 (PRBROF-23)
- ◆ バレエ・リュス公式プログラム/モナコ:モンテカルロ歌劇場/1927年5月 (PRBROF-31)
- ◆ バレエ・リュス公式プログラム/フランス:サラ・ベルナル劇場/1927年5月 (PRBROF-42)
- ◆ パネル/プロニスラワ・ニジンスカ/『牝鹿』[女主人]/1924年(複製)(SA-29)
- ◆ 葉書(サイン入り)/ヴェラ・ネムチノワ/『牝鹿』[青い服の娘]/署名は1927年(PC-B-105-01ws)
- ◆ 限定書籍/『セルゲイ・ディアギレフ劇場『牝鹿』』/舞台美術・衣装:マリー・ローランサン/フランス/1924年(AB-30)
- ◆ 書籍/『サティとダンス』/著:オルネラ・ヴォルタ/フランス/1992年(BK-0864-br)
- ◆ 切手/モンテカルロ歌劇場100周年記念/『牝鹿』/モナコ/1979年(ST-BL-98-1)

### 『牝猫』(1927)

- ◆ バレエ・リュス公式プログラム/フランス:パリ・オペラ座/1927年12月 (PRBROF-29)
- ◆ バレエ・リュス公式プログラム/フランス:パリ・オペラ座/1928~1929年 (PRBROF-33)
- ◆ バレエ・リュス公式プログラム/フランス:サラ・ベルナル劇場/1929年 (PRBROF-34)
- ◆ 写真(サイン入り)/ジョージ・バランシン/1926年 (PH-D-021-01 ws)
- ◆ 写真(サイン入り)/セルジュ・リファール他/『牝猫』/1927年(署名は台本のソベカ:ボリス・コフノのペンネーム) (PH-D-145-02 ws)
- ◆ 写真/セルジュ・リファール、アリス・ニキーチナ/年代不詳 (PH-D-149-02)
- ◆ 限定書籍/『セルジュ・リファール』/画:アイリーン・メイヨー/イギリス/1928年 (AB-10)
- ◆ 書籍/『バランシン伝』/著:バーナード・テイバー/アメリカ/1974年 (BK-0357-bio)

### その他(猫が登場するバレエ)

- ◆ アンティークプリント/ファニー・エルスラー/『淑女になった猫』/1837年頃 (AP-203)
- ◆ 葉書/オリガ・ブレオブラジェンスカヤ/『眠れる森の美女』[白猫]/ロシア/1900年頃 (PC-B-124-06)

## 主な参考文献・資料

- ◆ 薄井憲二/『バレエ千一夜』/新書館/1993年
- ◆ 海野弘/『ロシア・バレエとモダン・アート 華麗なる「バレエ・リュス」と舞台芸術の世界』/バイインターナショナル/2020年
- ◆ セゾン美術館、一條彰子編/『ディアギレフのバレエ・リュス1909-1929』/セゾン美術館/1998年
- ◆ 芳賀直子/『バレエ・リュス その魅力のすべて』/国書刊行会/2009年
- ◆ バーナード・テイバー/『バランシン伝』/訳:長野由紀/新書館/1993年

## Kenji Usui Ballet Collection

# Les Biches & La Chatte

2021/7/27(Tue.)~2021/8/29(Sun.)

(休館日はwebでご確認ください)

### ◎ 企画・監修

関 典子(せきのりこ/薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

Noriko Seki (Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

舞踏家・振付家・舞踏研究者。幼少よりクラシックバレエを学び、18歳でコンテンポラリーダンスに転向。お茶の水女子大学大学院博士後期課程を経て、現在、神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授。日本ダンス評論賞・兵庫県芸術奨励賞・神戸市文化奨励賞等受賞。

若林絵美(わかばやし えみ/薄井憲二バレエ・コレクション・アシスタントキュレーター)

Emi Wakabayashi (Assistant Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

後藤俊星(ごとう しゅんせい/薄井憲二バレエ・コレクション・アシスタントキュレーター)

Shunsei Goto (Assistant Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

兵庫県立芸術文化センター 薄井憲二バレエ・コレクション 担当

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町2-22 tel: 0798-68-0223 (代表) fax: 0798-68-0212



## Kenji Usui Ballet Collection

### 薄井憲二 バレエ・コレクション 2021 企画展

# 『牝鹿』と『牝猫』

2021/7/27(Tue.)~2021/8/29(Sun.)

稀代の興行師セルゲイ・ディアギレフが率い、革新的な作品を続々と発表した「バレエ・リュス(ロシア・バレエ団)」。本展では「動物」をモチーフにしたユニークな2作品をご紹介します。

1924年初演の『牝鹿』は、当時の社交界の雰囲気を描いた作品です。フランシス・ブーランクは当初『令嬢たち』と題して作曲していましたが、美術を担当したマリー・ローランサンが描く女性の動物的なイメージに触発され、フランス語で「若い娘たち」という意味を持つ『牝鹿』を題名にしたといわれます。

1927年初演の『牝猫』は、アンリ・ソーゲの音楽、ロシア構成主義の彫刻家ナウム・ガゴ、アントワーヌ・ベヴスナー兄弟の斬新な美術が話題となった作品。動物が出てくるバレエが好きでディアギレフのために、ボリス・コフノ(本作では「ソベカ」というペンネームを使用)が、イソップ寓話を下敷きに台本を手がけました。

含意としての『牝鹿』と、実際の猫役が登場する『牝猫』。両作品を通して、バレエ・リュスの革新性を感じただければ幸いです。

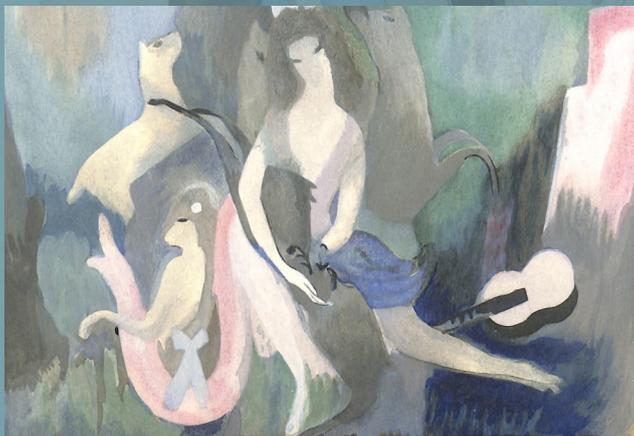
Hyogo Performing Arts Center

# 『牝鹿』 Les Biches

[ 振付 ] プロニスラワ・ニジンスカ  
 [ 音楽 ] フランシス・プーランク  
 [ 美術 ] マリー・ローランサン  
 [ 初演 ] 1924年1月6日 モンテカルロ歌劇場(モナコ)

一幕の歌を伴うバレエ。タイトルの『牝鹿』はフランスの口語で「親しい女友達」「かわいい子」といった意味もある。「現在の『レ・シルフィード』を目指す」と語ったディアギレフの意図を反映して、具体的なストーリーはなく、女主人のいるサロンで男女・男性同士・女性同士が戯れる情景バレエに近いものだった。パリのファッション界、社交界の雰囲気伝える華やかな作品。

幕のデザイン画



ローランサンの上絵は淡く繊細な色彩と奔放な素描による表現であったため、実際の衣装や装置として制作するには困難を極めたという。しかし、詩人ジャン・コクトーが「20世紀の艶なる宴」と称賛したとおり、『牝鹿』は大成功を収め、その後、彼女には、バレエや衣装、装飾関係の仕事が殺到するようになった。

ローランサンの下絵は淡く繊細な色彩と奔放な素描による表現であったため、実際の衣装や装置として制作するには困難を極めたという。しかし、詩人ジャン・コクトーが「20世紀の艶なる宴」と称賛したとおり、『牝鹿』は大成功を収め、その後、彼女には、バレエや衣装、装飾関係の仕事が殺到するようになった。



舞台



『女友達』リュボフ・チュルニェフ、リディア・ソコロフ



『女主人』プロニスラワ・ニジンスカ

ディアギレフは当初、「ニジンスカはプーランクの曲のラテン的な魅力に反応しないかもしれない」と心配し、『結婚』(1923)のようなロシア的・集会的・抽象的な表現になることを案じていたという。しかしニジンスカは『牝鹿』では、エロティックな女たち、勇壮な男たちの踊りを見事に振り付け、自身も「女主人」役を好演した。

「女主人」の役では何連にも重なった真珠の首飾りが効果的に用いられた。古くはロマンティックバレエ時代からバレリーナが身に着けていた真珠は、1909年のバレエ・リュス登場時にはオリエンタルなものとして、さらにこの『牝鹿』では、一転してモダンなイメージとなって再提示された。



『青い服の娘』ヴェラ・ネムチノフ

ドレス・リハーサルに長いヴェルヴェット・コートを着て現れると、ディアギレフは「ハサミを持ってこい」と怒鳴り、襟元を広いVカットに、裾を短く切り落として脚を露出させたという。「裸にされたような気分です!」と抗議するネムチノフに、ディアギレフは「それなら白い手袋でもするがいい」と言い返した。結果、この手袋は象徴的な効果を放つ衣装として採用された。

# 『牝猫』 La Chatte

[ 振付 ] ジョージ・バランシン  
 [ 音楽 ] アンリ・ソーゲ  
 [ 美術 ] ナウム・ガボ、アントワーヌ・ベヴスナー  
 [ 初演 ] 1927年4月30日 モンテカルロ歌劇場(モナコ)

一幕のバレエ。猫に恋した若者が女神アフロディテに祈ると、猫は人間の娘に変身する。2人は甘い時を過ごすのが、娘は目の前を走るネズミを見て猫に戻ってしまい、若者は絶望のあまり息絶える。ソープの原作では猫が人間に恋をするのが、台本のソベカ(ボリス・コフノのペンネーム)は逆の発想で執筆した。大変な成功を収め、ディアギレフも、『牝猫』を『薔薇の精』に並ぶ傑作だと考えていた。



『若者』セルジュ・リファール他



舞台

ロシア構成主義の彫刻家ガボとベヴスナー兄弟がデザインした装置と衣装の一部には透明素材のセロンが使われ、黒いオイルクロスの背景に反射し輝く照明効果があった。バランシンの振付も、独特のフォーメーションやオブジェを用いたシーンが独創的だった。1926年夏、パリでディアギレフが舞台美術の模型を目にしたときの様子を、評論家リチャード・バックルはガボ自身から聞いたという。

——「てかてか光る黒い(アメリカン・クロス)を背景に、透明の平面や曲面からなる建物がきらめいているのを見て、ディアギレフは瞬時に評価を下した。ガボの顔を見上げて「これこそ本物の神殿だ!」と叫んだのである。」(リチャード・バックル)



セルジュ・リファール、アリス・ニキーチナ

『牝猫』は元々、パリ・オペラ座からディアギレフが引き抜いたオリガ・スベツフツェフを売り出すための作品だった。モンテカルロでの初演は見事に演じたが、怪我のため、パリ公演からは急遽アリス・ニキーチナが務めた。後にはアロシア・マルコフが猫を踊り、やはり人気を博した。セルジュ・リファールはこの作品で初めての大役を担い、スターダンサーの頂点へ。

——「こんな大混乱の中から、ディアギレフ晩年の最大の成功が生まれたのです。それは取りも直さず、私自身の大きな勝利にもなりました。だから、今でも私のあだ名は(ネコちゃん)なのです!」(アリス・ニキーチナ)



セルジュ・リファール(画:アイリーン・メイヨー)



アリス・ニキーチナ



アロシア・マルコフ

後にバランシンは、4番目で最後の妻タナキル・ルクラク(あるいはルクレア)と共に「ムールカ(Mourka)」という名の白茶色の縞猫を飼っている。バランシンは「ついに振り付けるべき対象が見つかったよ」「ムールカを正式にデビューさせよう。タイトルは『バレエの進化:プティバからプティポー(Petipaw:ちっちゃい猫足)まで!』と話していたとか。妻のルクラクは『ムールカ:ある猫の自叙伝』(1964/撮影:マーサ・スウォープ)を出版している。



後年のバランシンと愛猫ムールカ(1950~60年代)